

# 山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の備前焼について

高 桑 登

## 1 はじめに

亀ヶ崎城跡は最上川河口の酒田湊に隣接して立地する。中世には東禅寺城と呼ばれ、文明10年（1487）の築城とされる。天正11年（1583）、武藤家家臣の前森蔵人が最上義光と結び東禅寺城主となり、庄内地方は最上氏の支配下となる。天正16年（1588）、本荘繁長が攻め入り、庄内は上杉領となる。その後、志駄修理亮等が東禅寺城主となる。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後は最上領となり、慶長8年（1603）、最上義光が亀ヶ崎城と名を改めた。元和8年（1622）の最上氏改易後は酒井氏が庄内に入り、以後鶴ヶ岡城を本城とする庄内藩の支城となる。

現在、本丸と二の丸には県立酒田東高等学校が建ち、校舎の改築等に伴って5次に及ぶ発掘調査が行われている（図2）。第1～3次調査では主に近世の遺物が出土し、特に第2次調査では近世前半の色絵磁器が大量に出土した（山口2004）。平成15・16年に実施した第4・5次調査では、3,230 の調査を行なった。16世紀前半から17世紀前葉の3面の遺稿面を確認し、遺構面間の遺物包含層から大量の遺物が出土した。慶長5年・天正12年の年号や、関ヶ原合戦前後の城主である「志駄修理亮」、「志

村伊豆殿様」等の人名が書かれた木簡を始め、大量の木製品の出土が目される。（山形埋文2004・2005）。

本稿では、第4・5次調査で出土した備前焼について報告する（註1）。また北海道・東北地方で出土した備前焼を集成し、亀ヶ崎城跡出土資料の位置付けを行う。

今回報告する資料は、前岡山県古代吉備文化センター参事伊藤晃氏、備前市教育委員会石井啓氏、岡山県古代吉備文化センター重根弘和氏に実見していただき、遺物の特徴や年代観等について御教示をいただいた。また、備前市教育委員会において伊部南大窯跡東3号窯・西2号窯出土資料を実見させていただき、亀ヶ崎城跡出土資料と比較する機会を得た。記して感謝申し上げる。

## 2 亀ヶ崎城跡出土資料について

接合前破片数で40点（推定個体数24点（註2））の備前焼が出土した（表1・図3、4）。器種（註3）の内訳は播鉢19点（13点）、徳利6点（3点）、平鉢4点（1点）、大甕3点（1点）、深鉢3点（1点）、茶入2点（2点）、壺2点（2点）、変形鉢1点（1点）である。

播鉢（3・6・7～10・15～21）は口縁帯が高く立ち上がり、外面に2条の凹線がつくものが多い。卸目は直

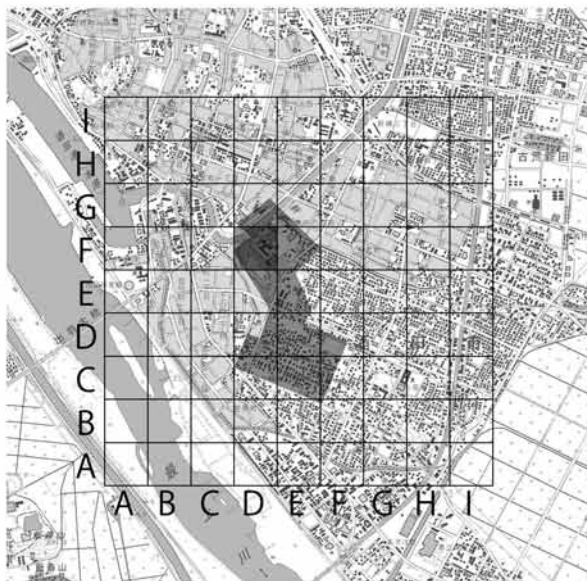


図1 遺跡位置図（1/50,000）

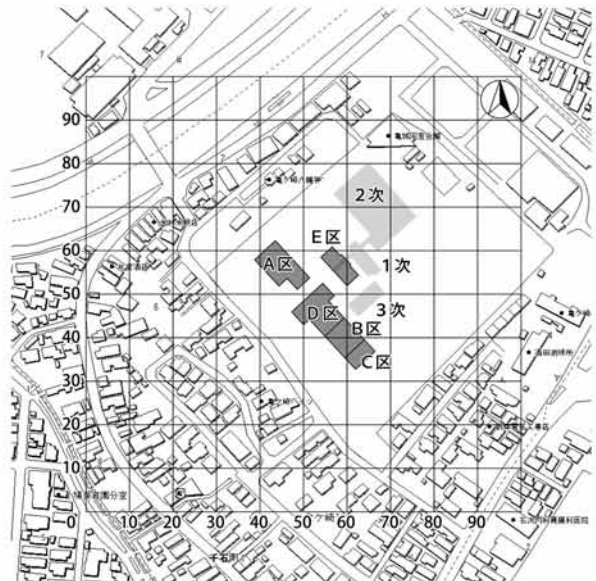


図2 調査区概要図（1/5,000）

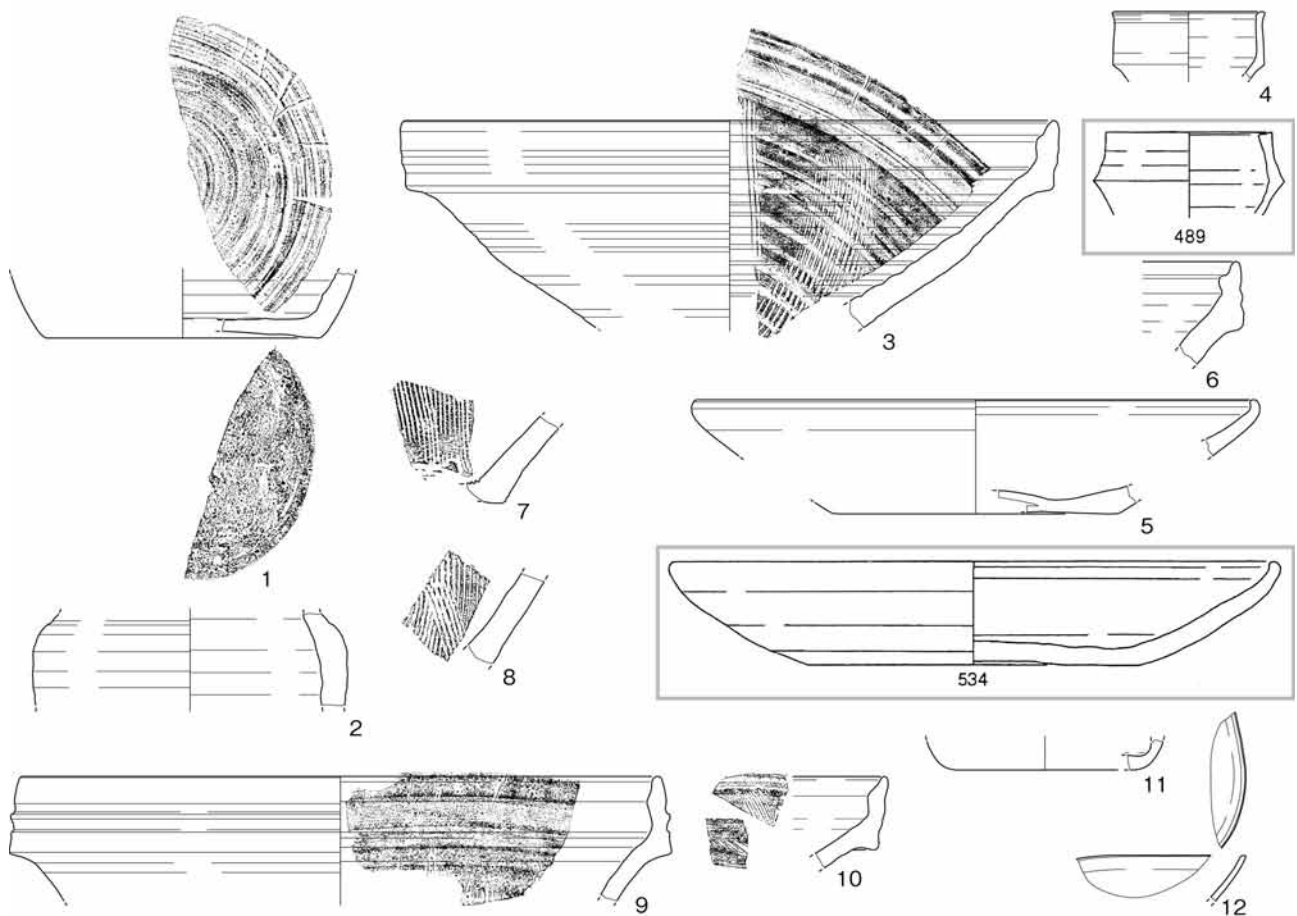


図3 亀ヶ崎城跡出土備前焼1 (囲み内は伊部南大窯跡東3号窯)

No.	調査区	器種	出土位置<接合前破片数> /接合後破片数	備考 (凡例: <計> 計測値 <胎> 胎土色調 <混> 胎土混入物 <成> 成形 <調> 調整 <他> その他特記事項 <No.> 登録番号)
1	A区	壺	4SD0097F<1>/1	<計> 底径 (145) <胎> N5/0灰色 <混> 白色粒多量/砂粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ケズリ/内面ロクロナデ <No.> SI218
2	A区	壺	FD5348III<1>/1	<計> 最大計 (166) <胎> N4/0灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI055
3	A区	擂鉢	FD5346IV<1>/1	<計> 口径 (342) <胎> 2.5YR6/4にぶい橙色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <他> 内面42 幅に12本の卸目 <No.> SI011
4	A区	茶入	FD5345VI<1>/1	<計> 口径 (78) <胎> 10YR5/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI070
5	A区	平鉢	FD5844VII<3>, FD5744VII<1>/3	<計> 口径 (295) / 底径 (150) / 器高 (60) <胎> 7.5Y6/1灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部ケズリ <No.> SI076
6	B区	擂鉢	4SD501第3杭列裏 (FD3862) <1>/1	<胎> N5/0灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI213
7	C区	擂鉢	FD3561IV<1>/1	<胎> 10YR4/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ <他> 内面卸目 <No.> SI097
8	C区	擂鉢	FD3662IV<1>/1	<胎> 7.5YR5/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ <他> 漆接ぎ <No.> SI098
9	C区	擂鉢	FD3764IV<1>/1	<計> 口径 (336) <胎> 7.5YR5/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <他> 内面卸目 <No.> SI087
10	C区	擂鉢	FD3662VIII<1>, FD3662IV<1>, FD3663IV<1>, FD3664IV<1>/4	<胎> 2.5Y5/1黄灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <他> 内面卸目 <No.> SI086
11	D区	德利	5SX0060F (FD5056) <1>/1	<計> 底径 (95) <胎> N5/0灰色 <混> 白色粒少量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI125
12	D区	鉢	FD4257V<1>/1	<胎> 10YR5/1褐灰色 <混> 白色粒少量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI160
13	D区	茶入	FD4256V<1>/1	<計> 底径 (50) <胎> 2.5Y5/1黄灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ+ケズリ/内面ロクロナデ <他> 外面沈線 <No.> SI162
14	E区	德利	FD5558VI<1>/1	<胎> N5/0灰色 <混> 白色粒少量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI173
15	E区	擂鉢	5SX2254床 (FD5460) <2>, FD5461VIII<1>/1	<計> 底径 (130) <胎> 2.5YR4/1赤灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部砂底 <他> 内面卸目27 幅に11本 <No.> SI209
16	E区	擂鉢	FD5659VIII<1>/1	<胎> N5/0灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <他> 内面卸目 <No.> SI182
17	E区	擂鉢	FD5559VIII<1>, FD5559VI<1>/2	<胎> 7.5YR5/2灰褐色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ <No.> SI187
18	E区	擂鉢	FD5659VIII<1>/1	<胎> 7.5YR5/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <他> 内面29 幅に11本の卸目 <No.> SI189
19	E区	擂鉢	FD5659VIII<1>/1	<胎> N5/0灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI197
20	E区	擂鉢	FD5957VIII<1>/1	<胎> N4/0灰色 <混> 砂粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部砂底 <他> 内面卸目 <No.> SI200
21	E区	擂鉢	FD5460VIII<1>/1	<計> 口径 (276) <胎> 5YR5/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI203
22	E区	大甕	FD5460VIII<2>, FD5558VI<1>/2	<計> 口径 (500) <胎> 2.5YR4/1赤灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ナデ/内面ナデ <No.> SI185
23	E区	德利	FD5459VIII<2>/1	<計> 口径44 <胎> N5/0灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ <No.> SI194
24	E区	建水	FD5660IX<1>, FD5659VIII<1>, FD5558VII<1>/3	<計> 口径 (248) / 底径 (140) / 器高 (142) <胎> 7.5YR4/1褐灰色 <混> 白色粒多量 <成> ロクロ <調> 外面ロクロナデ+ケズリ/内面ロクロナデ <他> 口縁端部溶着・剥離後再調整 <No.> SI208

表1 亀ヶ崎城跡出土備前焼観察表

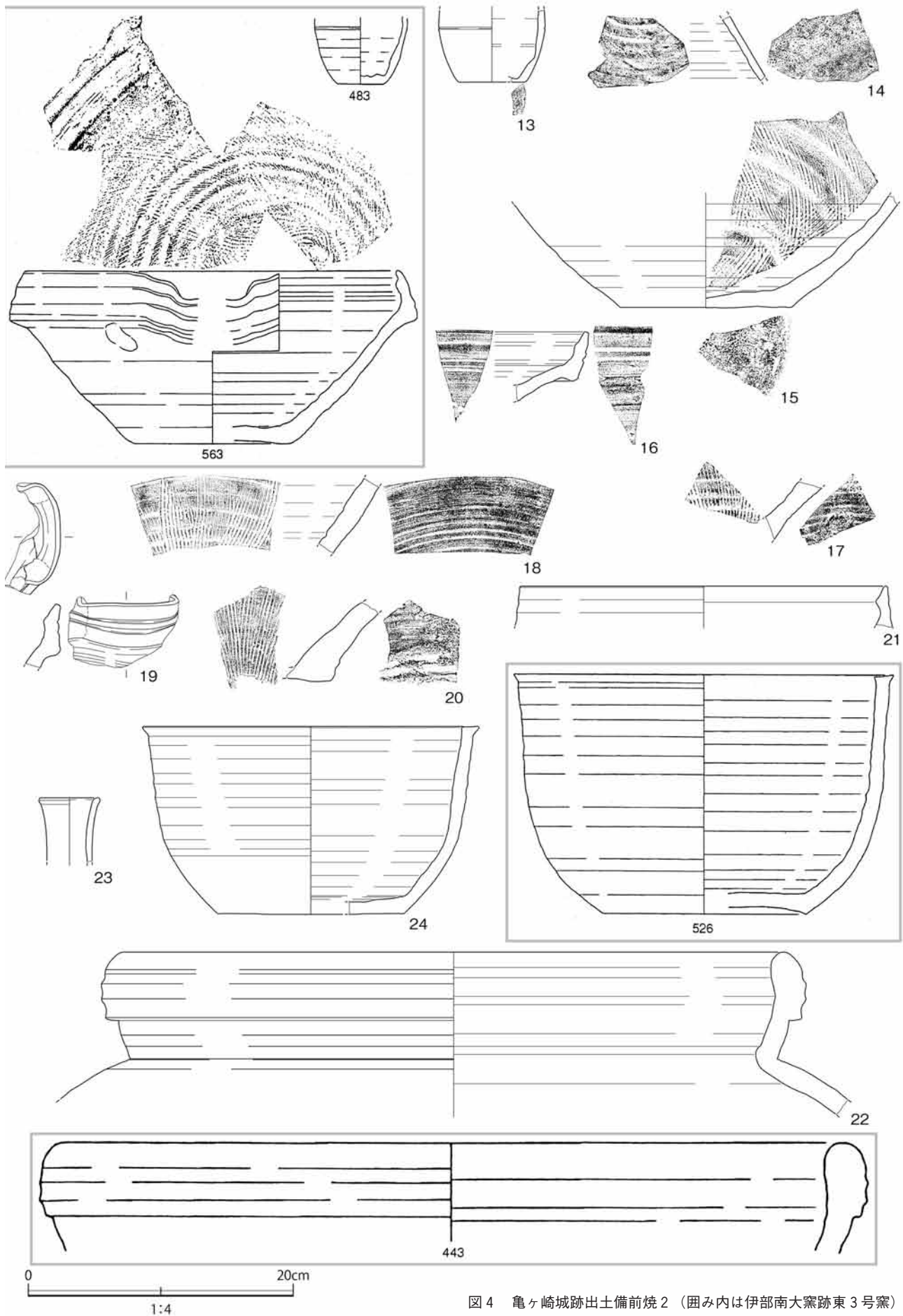


図4 亀ヶ崎城跡出土備前焼2 (囲み内は伊部南大窯跡東3号窯)



線的またはやや湾曲した放射状で、卸目同士が交差するものも認められる(8・15)。口縁内面のやや下がった位置に稜を持つものが多い。焼成が堅牢なため明確な使用痕が認められるものは少ないが、内面の摩滅が顕著な個体(3・7・20)も確認できる。

大甕(22)は頸部が外反気味に立ち上がるが、口縁帯はやや内湾する。口縁帯の外面には、凸帯状に3条の稜が巡る。口縁帯の肥厚は顕著ではない。頸部と肩部の境界に細いヘラ状工具による調整痕が認められる。

平鉢(5)は口縁部が強く内側に屈曲する。屈曲部は丸みを帯びる。底部は胎土に空気が混入したことによって焼成時に膨らんでいる。内面に黄褐色のゴマ状の自然釉がかかる。

茶入は珠算玉型(4)、胴部に沈線を施すもの(13)があり、伊部南大窯跡東3号窯に類例が認められる(備前市教委2003)。

深鉢(24)は内外面にロクロ目が強く残り、外面下半はケズリ調整が施される。口縁部は外側が強く張り出し、内側には重ね焼きによる融着を剥離した痕跡が認められる。東3号窯に類例が認められる。

徳利は体部破片1点(14)、口縁部破片1点(23)が出土している。口縁部が玉縁状となり、ゆるく外反する。東3号窯製品と比較すると口縁部の外反が弱く、より後出の特徴を示す。体部破片の外面にはゴマ状の自然釉がかかる。

変形鉢(12)は薄作りで、ロクロ成形後に歪ませており、方形となると考えられる。口縁部内面が面取りされている。内面にゴマ状の自然釉がかかる。

亀ヶ崎城跡出土資料と東3号窯製品を比較すると、後出する特徴を示す徳利(23)や、類例の認められない変形鉢(12)、年代の特定の困難な体部・底部破片を除くと、大半の資料は形態的に類似し、ほぼ同時期と考えられる。東3号窯製品は乗岡編年1b期(乗岡2005)に該当し、文禄年間に入らない16世紀第4四半期と考えられている(石井2003)。この年代観は、亀ヶ崎城跡の第4・5次調査において出土した瀬戸美濃、越前等の陶磁器の年代や、天正12年(1584)・慶長5年(1600)といった紀年銘資料とも矛盾せず、この時期に比較的多数の備前焼が山形県の庄内地方に搬入されていることが明らかとなった。

### 3 北海道・東北地方出土の備前焼

16～17世紀における北海道・東北地方において、管見の限りでは23遺跡で備前焼の出土を確認した(註4)。県別では北海道5遺跡、青森県8遺跡、秋田県2遺跡、山形県4遺跡、宮城県1遺跡、福島県3遺跡となる。遺跡の性格では城館・城下町が最も多い。集落・屋敷地も4遺跡で出土しているが、美々8遺跡や野脇遺跡、浜通遺跡等、交易との関連が指摘されている遺跡が多い。一般集落の発掘例が少ないことにもよるが、大半が城館と流通関係の遺跡から出土していることを指摘できる。

器種は播鉢が最も多く、21遺跡から出土している。次いで徳利(瓶類)、平鉢、水指・茶入れ等の各種茶道具が続く。

器種ごとの特徴を述べる。播鉢は口縁帯下部が肥厚し断面三角形を呈するものが多く、乗岡編年近世1c期から2期に該当すると考えられる。根城跡出土資料(13)は口縁帯が高く立ち上がり、亀ヶ崎城跡と同時期、乗岡編年近世1b期に遡る可能性がある(註5)。

徳利の口縁部は近世追手門前通遺跡群(21)、城東町遺跡(22)から出土している。口縁端部が尖り、外面に稜を持つ形態は伊部南大窯跡西2号窯製品に類似する(石井2003)。

平鉢は守山城跡(20)、近世追手門前通遺跡群(21)から出土している。守山城跡出土資料は口縁部の屈曲が丸みを帯びるものと、屈曲部が小さくシャープな形態のものがあり、東3号窯と同時期か、やや先行すると考えられる。

次に一括性の高い出土状況を見ると、イルエカシ遺跡(1)では建物跡から出土し、初期伊万里皿、肥前陶器播鉢が共伴する。(平取町遺跡調査会1989)。

十三湊遺跡(6)では青花皿、初期伊万里、肥前陶器砂目溝縁皿等1630年代を中心とした遺物と共伴している。(関根2003)。

浜通遺跡(12)では遺物包含層から出土し、瀬戸美濃折縁皿、志野織部皿、肥前陶器播鉢・碗・皿・向付等大量の陶磁器が共伴している。肥前陶器の主体は胎土目段階で砂目段階ものを少量含む。肥前磁器は含まない。慶長年間を主体とした17世紀第1四半期の年代が想定されている(青森埋文1984)。



No.	遺跡名	所在地	器種	遺跡の性格	文献
1	イルエカン遺跡	北海道平取町	播鉢	集落	平取町道跡調査会1989『イルエカン遺跡』
2	釜加遺跡	北海道千歳市	播鉢	チャシ？	千歳市教育委員会1967『千歳遺跡』
3	美々8遺跡	北海道千歳市	播鉢	集落	(財)北海道埋蔵文化財センター1997『美沢川流域の遺跡群X X ー新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第114集
4	瀬田内チャシ跡	北海道瀬棚町	播鉢	チャシ	峰山蔵1980『瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』北松山町教育委員会
5	上ノ国漁港遺跡	北海道上ノ国町	播鉢	港湾	上ノ国町教育委員会1987『上ノ国漁港遺跡ー昭和58・60年度発掘調査報告書ー』上ノ国町教育委員会
6	十三湊遺跡	青森県五所川原市	播鉢	港湾	関根達人2003『2 近世の陶磁器とその変遷』『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』青森県
7	浪岡城跡	青森県青森市	播鉢	城館	浪岡町教育委員会1984『浪岡城跡V I I I 』昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書
8	堀越城跡	青森県弘前市	播鉢	城館	弘前市教育委員会2006『史跡津軽氏城跡 堀越城跡発掘調査報告書V I I 』弘前市教育委員会 弘前市教育委員会2005『史跡津軽氏城跡 堀越城跡発掘調査報告書V I 』弘前市教育委員会
9	野脇遺跡	青森県弘前市	播鉢、德利	屋敷地	青森県埋蔵文化財調査センター1992『野脇遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
10	弘前城跡	青森県弘前市	播鉢	城館	弘前市教育委員会2003『史跡津軽氏城跡 (弘前城跡) 弘前城北の郭発掘調査報告書』
11	弘前城跡長勝寺構	青森県弘前市	播鉢	城館	弘前市教育委員会2003『史跡津軽氏城跡 (弘前城跡) 長勝寺構長勝寺発掘調査報告書』弘前市教育委員会
12	浜通遺跡	青森県東通村	播鉢	集落？	青森県埋蔵文化財調査センター1984『浜通遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第80集
13	根城跡	青森県八戸市	播鉢	城館	八戸市教委1993『根城ー一本丸の発掘調査ー』八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
14	脇本城跡	秋田県男鹿市	洗	城館	男鹿市教育委員会2004『脇本城跡第11次・第12次調査報告』男鹿市埋蔵文化財調査報告書第28集
15	東根小屋町遺跡	秋田県秋田市	播鉢、鉢、瓶	城下町	秋田県埋蔵文化財センター2005『東根小屋町遺跡』秋田県文化財調査報告書第387集
16	亀ヶ崎城跡	山形県酒田市	播鉢、大甕、德利、平鉢、深鉢、変形鉢、茶入	城館	(財)山形県埋蔵文化財センター2004・2005『亀ヶ崎城跡第4・5次調査説明資料』
17	鶴ヶ岡城跡	山形県鶴岡市	播鉢、德利	城館	(財)山形県埋蔵文化財センター2002『鶴ヶ岡遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
18	城南一丁目遺跡 (山形城三の丸)	山形県山形市	播鉢、瓶	城館	(財)山形県埋蔵文化財センター1999『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第69集
19	双葉町遺跡 (山形城三の丸)	山形県山形市	播鉢、瓶	城館	山形市・山形市教育委員会2004『双葉町遺跡 (山形城三の丸跡) 発掘調査報告書 近世編』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書17集 山形市・山形市教育委員会2006『双葉町遺跡・城南町遺跡 (山形城三の丸跡) 発掘調査報告書 近世編』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書25集
20	仙台城三の丸跡	宮城県仙台市	水指、德利、播鉢	城館	仙台市教育委員会1985『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
21	守山城跡	福島県郡山市	大皿、德利	城館	(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団2004『守山城跡ー第2・3・4次調査報告ー』郡山市教育委員会
22	近世追手門前通遺跡群 (三春城下町)	福島県三春町	播鉢、盤、德利、建水	城下町	三春町教育委員会1995『近世追手門前通遺跡B地点ー発掘調査報告書ー』三春町文化財調査報告書第22集 三春町教育委員会2003『近世追手門前通遺跡E地点 町民センター関連遺跡発掘調査報告書』三春町文化財調査報告書第28集
23	城東町遺跡 (会津若松城下町)	福島県会津若松市	德利	城下町	会津若松市教育委員会1994『若松城下 城東町遺跡発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告書第38号

表 2 北海道・東北地方の備前焼出土遺跡

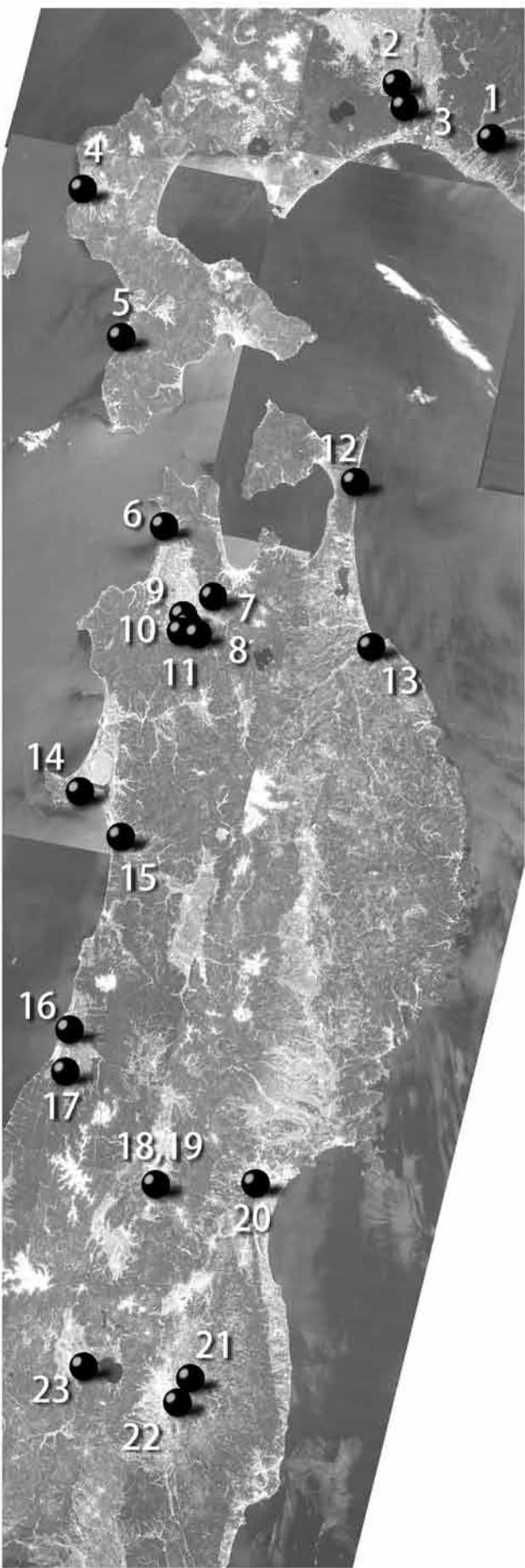


図 5 北海道・東北地方の備前焼出土遺跡分布

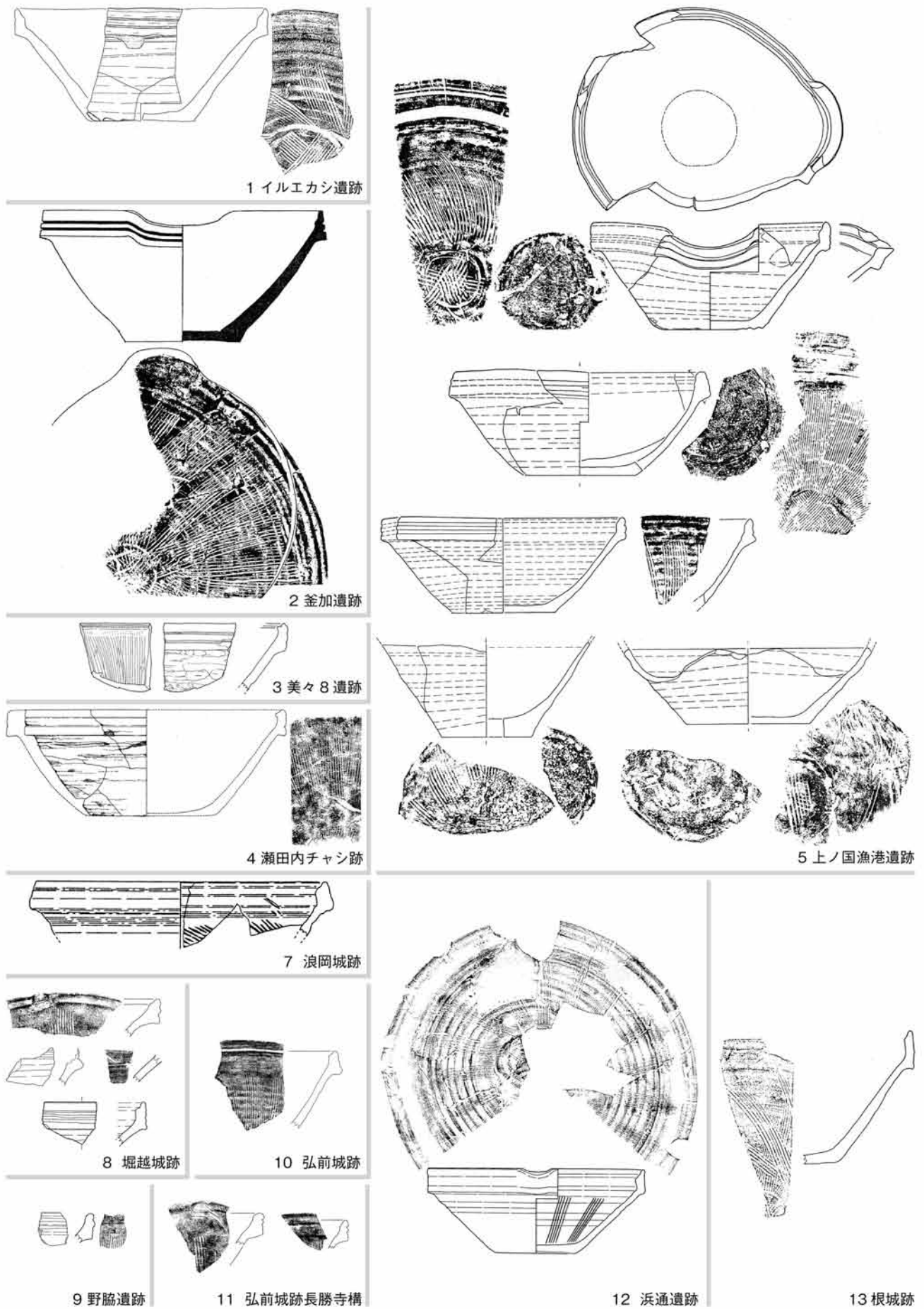


図6 北海道・東北地方出土の備前焼1



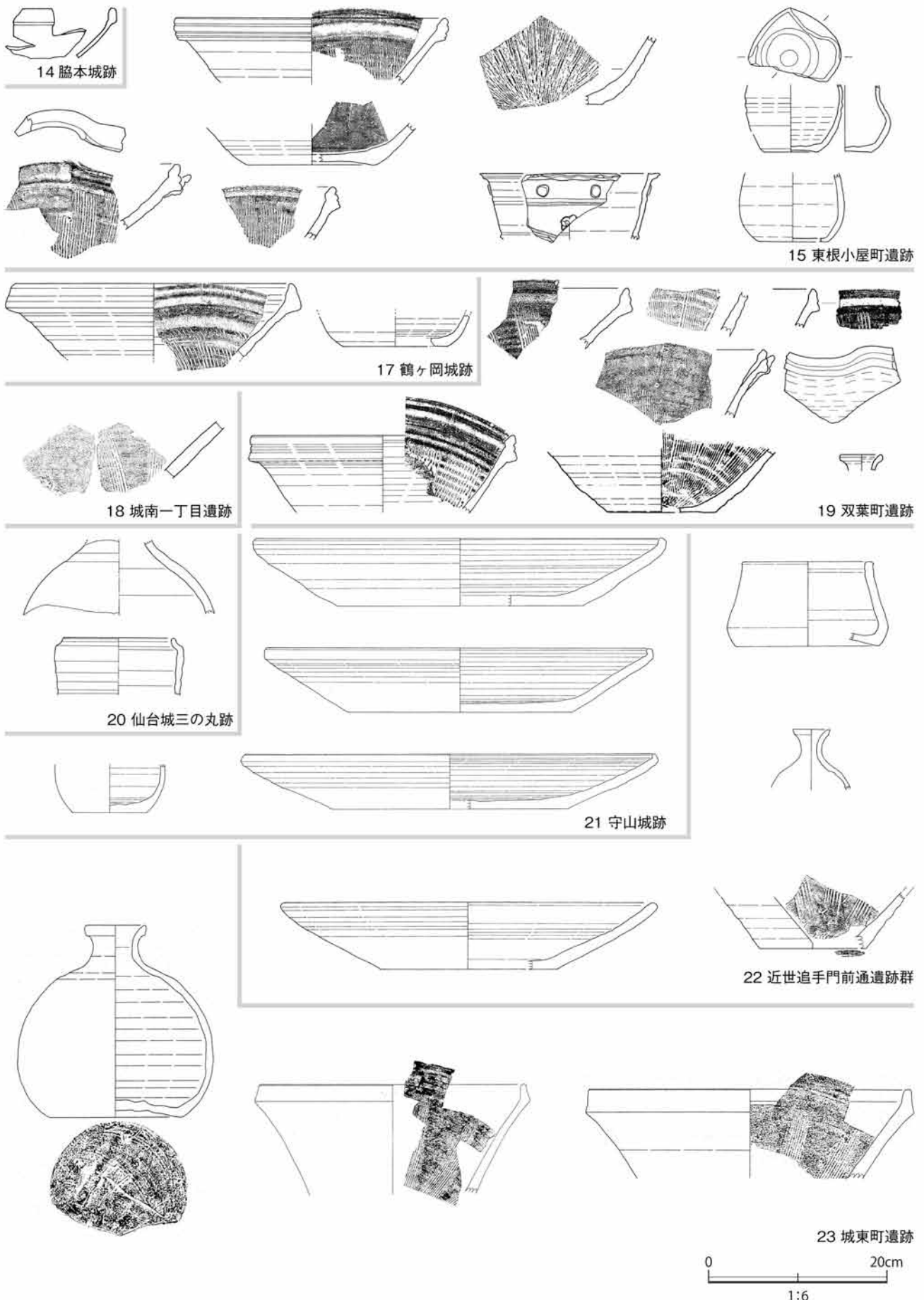


図7 北海道・東北地方出土の備前焼 2



双葉町遺跡(19)の播鉢底部は、底面に完形の陶磁器が並べ置かれた祭祀的な出土状況の遺構から出土している。肥前磁器碗・皿、肥前陶器砂目溝縁皿等が共伴し、1650～1670年代と想定されている。他の備前焼も同時期の遺構から出土している(山形市教委2004)。

仙台城三の丸跡(20)の水指は一括廃棄土坑から出土しており、黄瀬戸皿、鼠志野大鉢、織部皿・向付・太平鉢、御深井釉皿、肥前陶器向付など茶道具の優品を含む多量の遺物が共伴している。寛永15年(1638)を下限とする年代が想定されている(仙台市教委1985)。

守山城跡(21)では火災整理層から一括して大量の遺物が出土している。白磁端反皿、青花内湾皿・鏝皿、素三彩法花瓶、瀬戸美濃、かわらけ等が共伴している。肥前陶器、志野は含まない。領主の交代等から慶長3年(1598)～同5年(1600)の年代が想定されている(郡山市埋文2004)。

近世迫手門前通遺跡群(22)の平鉢、建水、徳利は焼土層から出土し、他の陶磁器等から1660年代を下限とする年代が想定されている(三春町教委2003)。

以上、遺物の形態的な特徴や一括資料の検討から、北海道・東北地方における備前焼の出土状況は以下のような特徴を指摘できる。

搬入が開始されるのは天正年間を中心とした16世紀第4四半期と考えられ、亀ヶ崎城跡、根城跡、守山城跡の資料がそれにあたる。この段階では点的な分布にとどまるが、17世紀前半になると日本海側を中心に面的に広がり、北海道まで分布範囲を広げる。

出土する遺跡は城館跡の他、港湾遺跡や交易に関係する集落が多いことが注目される。

器種は播鉢が中心で、城館ではこれに茶道具が加わる。他の陶磁器の茶道具と共伴する例も多い。17世紀には、特に日本海側で肥前陶器が播鉢の主体となり多量に出土するが、備前焼は単独または数点のみの出土にとどまる例が多い。

## 4 おわりに

亀ヶ崎城跡出土の備前焼について、生産地の資料、周辺の消費地出土の資料と比較を行った。その結果、当地域で備前焼を出土する遺跡には、城館の他、流通に関係した遺跡が多いことを確認した。中世前半に点的に出土する滑石製石鍋・山茶碗と流通との関連が指摘されており(高橋2003)、備前焼も同様の性格を持つ遺物の可能性を指摘しておきたい。ただし、備前焼は茶道具としての一面も大きいことには注意を払う必要がある。

また、亀ヶ崎城跡出土の備前焼は、当地域に備前焼が搬入される初期の段階の資料であること、器種の豊富さや出土量ともに当地域では傑出した資料であることを確認することができた。特に東日本でもほとんど出土しない(註6)大甕の出土が注目される。亀ヶ崎城跡が酒田湊に隣接して立地し、城館と流通拠点の二つの性格を合わせ持った遺跡であることによると考えられる。

亀ヶ崎城跡の第4・5次調査では、出土した備前焼と同時期の犬窯第3段階後半(藤澤2002)の瀬戸美濃皿が、完形のものも含め多数出土している。天正年間、最上氏が庄内地方への干渉を強める時期にあたる。この時期、出土遺物が量、質ともに充実することは、最上氏の酒田湊経営と関連すると考えられる。

今回は形態の特徴から年代比定を行ったが、今後報告書作成を進める中で、詳細な出土状況や共伴遺物の検討を行う必要がある。また、この地域で主体となる越前や肥前陶器との比率や使われ方の違いを検討し、備前焼がこの地域に搬入される意味を考えていきたい。

### 註

- 1) 今回の報告は報告書刊行前の中間報告であり、平成20年度に予定している報告書刊行をもって正式報告とする。
- 2) 個体識別法による。
- 3) 「変形鉢」以外の器種名は石井2003に拠った。
- 4) 報告書に備前焼と記載されているものを集成した。遺物は実見していない。
- 5) 22の城東町遺跡出土資料は、単純な口縁形態からより古い可能性もあるが、備前焼かどうかも含めて検討を要する。
- 6) 東京、神奈川等で若干の出土例がある(伊藤2005)。

### 引用文献

- 石井 啓 2003『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市埋蔵文化財調査報告第5集  
 伊藤 晃 2005「備前焼の流通」『備前焼フォーラム資料集 備前焼研究最前線ⅠⅡ』備前市歴史民俗資料館紀要7  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004・2005『亀ヶ崎城跡第4・5次調査説明資料』  
 高橋 学 2003「滑石製石鍋と山茶碗—雄勝町館堀城跡出土の事例から—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号  
 乗岡 実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』  
 藤澤良祐 2002「瀬戸美濃編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯  
 山口博之 2004「亀ヶ崎城跡」『初期伊万里展』NHKプロモーション